活動紹介 2

平成30年度 あしたのまち・くらしづくり活動賞 内閣官房長官賞受賞

外国にルーツをもつ子どもたちへの包括的支援

大阪府大阪市天王寺区 こどもひろば

こどもひろば事務局長 鵜飼 聖子

外国にルーツをもつ子どもたちの地域日本語教室

平成17年5月設立の「こどもひろば」は、定住外国人家庭の子どもたちが日本の学校で、日本語が分からない、文化が違う、と「しんどさ」を感じていることを知り、居場所の提供を目的とした地域日本語教室だ。「外国にルーツをもつ」と呼ばれる子どもたちは（国籍は問わず）多文化な背景をもち、日本語を母語としないため、同質を前提としがちな日本の学校制度では常に同化の圧力を受け、差別やイジメを受けることもある。同じ立場の子どもたちが集う、学校以外の居場所が大切だ。毎週月曜日の夕刻5時から学習支援教室を開催している。

設立当初、学習者は小中学生を想定したが、実際に足しげく通ってきたのは母国で中学校を終えて来日した15歳以上の子どもたちだった。彼らは「高校に行きたい」とほとんど日本語ゼロで現れる。日本の高校に進みたいと思ってもどうしたらいいのか、保護者にも情報はない。彼らの高校受験を支援する活動がすぐさま始まった。社会制度の狭間で、どこにも所属できない彼らを支え、高校につなげるのは地域の役割であろう。

教室風景（小学生作文発表）平成29年度

大阪国際交流センターとの共催事業となる

全くの市民グループであった「こどもひろば」は徐々に存在が知られるようになって、小中学生の参加も増えていった。平成22年4月から（財）大阪国際交流セ

ンター（現：公益財団法人）との共催事業となり、会場も同センターに移した。センターが窓口になったことで外国人家庭からのアクセスもしやすくなり、さらに学習希望者は増えていった。これまでの実績を認められ、教室運営と支援の実績は「こどもひろば」が全面的に任された。高校進学を希望する「ダイレクト」の子どもたちも毎年数名～10名を超え、現れるようになった。彼らの進学支援を活動の中心に据え、教室活動をセンターと多くのボランティアに支えてもらって14年目となった。

高校受験にのぞむ 受験勉強と手続きをサポート

日本語がほとんどできない、外国で育ったダイレクトたちを高校に送り出すには学習支援だけでは不十分だ。日本語と受験科目の学習を計画的に進め、同時に手続き（「応募資格審査」）の準備をする。日本の学校を卒業していないため教育委員会の承認が必要なのだ。保護者と書類の準備をし、必要とあれば証明書などを翻訳し、教育委員会に通訳を伴って同行する。また、どの高校を受けるか選択するために必要な情報を保護者と子どもに提供する。進路説明会や高校の体験入学などに引率する。合格するためには受験勉強だけでなく、情報が同じくらい大切なのだ。「こどもひろば」は、一緒に受験の準備をし、その子どもが自分の学力を発揮できるように応援する。日本語が少しできても入試問題を理解できるわけではない。何度も何度も試験問題に取り組み、何を解答すればいいのかを体得していく。他に行くところがない孤立したダイレクトの子どもたちは一生懸命英語や数学に挑戦する。来日が12月や1月の場合もあって、入試への出願までの限られた時間でスタッフは保護者と面談し、書類を確認し、手続きに奔走する。子どもは全く初めての日本語での入試問題に悪戦苦闘する。時には厳しく、時にはあたたかく見守り、応援するスタッフと、同じ立場の仲間たちに出会い、2月中旬の入試までダイレクトの子どもたちは本当に努力する。模試形式で入試の受け方を知り、面接がある場合は想定質問で受け答えを練習する。資格承認が得られたら、次は志願書をスタッフと一緒に記入し、写真を貼って、高校に持っていく（出願）。スタッフは入試当日の持っていくもの、集合時間の厳守など、細かく注意を繰り返す。合格発表の日も一緒に見に行き、そこでやっと「学校に行け

フィリピン親子面談（通訳者あり）平成29年度

大阪府教委資格審査（事前相談、中国ルーツ、通訳者あり）平成28年度

る」と満面の笑みを見ることができる。高校に行き、受験番号を見つけて保護者と肩を抱き合い、手を取り合って喜ぶ。そのときこぼれる子どもたちの満面の笑顔が無償のボランティアスタッフにとって最高の報酬だ。

これまで、約100名のダイレクトの高校進学を支援し、中学生の参加も増えたので毎年受験生がたくさんいるようになった。高校進学を果たした子どもたちにはボランティア登録をしてもらい、母語で相談にのったり教科学習支援をしたり、時には通訳もしてもらう。こうしてボランティアとして活躍するモデルを教室で小中学生に見てもらう。日本語が難しくても「頑張って高校に行こう」「先輩みたいにボランティアもできるようになろう」と後輩も教室に通ってくる。

同窓会（ラフティング）平成28年度

「こどもひろば同窓会」（年1回、野外活動）には、高校で孤立しがちな外国ルーツの生徒も広く参加できる。こうして教室とつながっている高校生から色々な相談もある。大学進学のための面接練習や小論文の添削、大学生からは就活の相談まで舞い込む。

小中高の学校やほかの支援団体と連携

多様な支援活動をしていく上で、小中高の学校や他の支援団体との協働が必要なことが多い。自分の教室だけで大阪の外国ルーツの子どもたち全部を支援できるわけではない。

学習支援以外に生活相談や緊急の支援が必要な時もある。大阪のどこに住んでいても同じように支援が受けられるようにと、7年前から（公財）大阪国際交流センターと共催でネットワーク構築事業も始めた。「こどもひろば」のダイレクト支援の経験を共有し、他団体の事例も学ぶために昨年から「事例研究会」も開催している。

同窓会（ブドウ狩り）平成29年度

これまで約500名の子どもたちが教室を訪れた。ルーツは中国が最も多く、タイ、フィリピン、ネパール、台湾、韓国、米国、ブラジル、コロンビア、ペルー、イラン、パキスタン、フランス、セネガルと14か国に及ぶ。1回だけの相談もあれば、小学5年生から参加し、現在大学生ながら時々顔を出す子もいる。同窓会に家族で参加する元ダイレクトもいる。一人一人と丁寧に向き合い、よい人間関係を保ち、社会の一員として子どもの「育ち」を見守り、「なりたい自分」になれるよう支える「包括的支援」を私たちこどもひろばは目指している。